

# 程度的な側面を持つ名詞とそれを量る形容詞類との共起関係

## ——通時的研究——

服 部 匡

同志社女子大学

**【要旨】** 戦後 60 年間の国会会議録をデータとして用い、程度の大小を問題にしうる側面を持つ名詞のうち、二字漢語を語基とする「～性」「～率」「～度」「～量」「～力」の形の名詞について、尺度的な形容詞類（「大きい/多い/強い/高い…」 「小さい/少ない/弱い/低い…」）との共起傾向の推移を調査した。十分な用例数のある名詞に関する限りでは、次のようなことが言える。

少なくとも「～性」「～率」「～度」の形の名詞では、大の側の形容詞類のうち「高い」との共起比率の上昇が多く語で観察された。また名詞によっては小の側の形容詞類の中でも「低い」との共起比率が上昇しており、両者の推移が対応しているかに見える語もある。一方、「～量」や「～力」では、調査の範囲では、変動傾向を明確には述べにくい。「～性」「～率」「～度」では、その程度の大きさを表わすのに「高い」が主として用いられる方向へと日本語の変化が進行中の可能性がある\*。

**キーワード:** コーパス, 形容詞, 程度, 名詞, コロケーション

### 1. 概要

複数の要素が文法に従った結合をする場合に、それぞれの要素の（統語的・意味的・文体的）特徴からは説明し難いような共起傾向の強さ/弱さが観察されることがある。さらに、ときには、要素間の共起傾向に通時的な変遷が見られる。こうした問題は、研究者の内省によっては十分な解明が困難であり、特に通時的な変遷に関しては、内省は無力である。

本稿は、大規模なコーパスの通時的分析により、従来報告のない種類の変化が少なくとも過去数十年にわたって進行している可能性を指摘するものである。

「可能性」のような名詞は、程度的な (gradable) 属性を表わす側面を有している。一方「大きい/高い/強い/多い/濃い」などの形容詞は、本来は、それぞれ異なる

\* 本稿は平成 18 ～ 22 年度文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「日本語コーパス」の計画研究の 1 つである「コーパスを用いた日本語研究の精密化と新しい研究領域・手法の開発」(研究課題番号 18061004, 通称「日本語学班」) による研究成果の一部である。内容の一部は、上記特定領域研究の平成 21 年度公開ワークショップ(東京工業大学, 2010 年 3 月 16 日), 第 26 回表現学会近畿例会(同志社大学, 2010 年 2 月 27 日), 日本語学会 2010 年度秋季大会ワークショップ(愛知大学, 2010 年 10 月 23 日)などで発表・講演したものに基づく。また、査読者の指摘に基づいて一部の内容を修正・割愛・加筆した。関係の各位にお礼申し上げる。

る尺度上での値の大きさを表すものである。ところが「(…) <sup>1</sup>可能性が」に対する述語としては、上のすべての形容詞の用例があり、どれを用いても可能性の度合いを量っていることは変わらない<sup>2</sup>。

程度的な側面を持つ名詞に対してそれを量る形容詞類の種類に多様性が見られることは西尾 (1972: 142, 362)・國廣 (1982: 90)・浅井 (1983, 1984)・秋元 (1999) などが指摘している。

コーパスの用例を調査すると、同じ「～性」という形の名詞でも語によって、よく結合する形容詞の種類には相違があることが分かる。例えば、服部 (2010a, 2010b) の新聞記事の調査によれば、「二字漢語 + 「性」」の形の名詞の多くではその程度の大きさを述べるのに主に「高い」が用いられるが、「感受性」などでは「強い」が最も多く用いられる。また、同じ調査によれば、こうした名詞では、大の側の形容詞類との共起傾向と、小の側の形容詞類との共起傾向は必ずしも対応しない。例えば、「危険性」への共起は、大の側では「高い」が際立って多いが、小の側では「低い」と共に「少ない」も多い。また、どの「～性」も「濃い」とはほとんど共起しないが、「必要性」など、「薄い」とよく共起する語がある。

こうした共時的な観察を踏まえ、本稿では、1947年以降の60年間の国会会議録をデータとして用い、二字漢語を語基として「性/率/度/量/力」の接尾辞を持つ名詞について、その度合いを量る形容詞類の選択傾向の通時的な変遷を分析する。その結果、従来報告のない種類の変化<sup>3</sup>が進行している可能性を示唆する事実が知られた。

## 2. 調査対象・方法

「～性」その他の形の名詞について、その大きさ（小ささ）を表わす形容詞類と

<sup>1</sup> 前に連体修飾成分がある場合もない場合もあわせて扱う。「可能性」の例で言えば、いわゆる外の関係の修飾節やノの付加された名詞句を伴う（またはそれらが想定される）のが典型的な用いられ方である。

<sup>2</sup> もっとも、例えば「可能性が大きい」と「可能性が多い」のすべての現われにおいて意味のどのような面にも相違がないとは言いきれないようである。

秋元 (1999) は、用例の検討から、「可能性」に関して「〈大きい〉〈高い〉〈強い〉」の使い分けは、確信度の度合いによるものであり、度合いが大きくなるに従い、大きい→高い→強いと使い分けられている」と述べている。秋元の挙げる少数の例を見る限りではもっともらしく感じられるが、「確信度」のような要因の関与を定量的な分析によって裏付けることはおそらく困難であり、他の方法・観点による研究に待たなければならない。もっとも仮に（共時的に）形容詞によって微細な意味の相違が生じるとしても、本稿で論じるような、名詞と各形容詞との共起傾向の通時的変動の理由がそこから説明されるわけではない。

<sup>3</sup> ここで指摘するような推移について述べた文献は見当たらない。ただ、浅井 (1983) によれば、NHKの放送用語委員会では、1969年に「『公算』は、確率で量的な表現であるから、数の大小で表し、質的な表現である強弱は使わない」と決定したものの現実の放送では「公算が強い」も用いられており、放送現場からの提案により1976年に再審議の結果「本来は『公算が大きい』であるが『公算が強い』も使ってよい」と修正したという。その理由は「『公算』には『確率』の意味があり、数量的にとらえると、『公算が大きい』と表現するのが普通であろう。しかし、最近では、『公算』を『可能性』『見込み』の意味で用いることが多く、『公算が強い』と表現してもあまり違和感は感じられない」である。文化庁 (1984) にも同じ問題への言及がある。

の共起用例数を調査した。用いたデータは国会会議録検索システムからダウンロードした1947年から2006年までの全会議の記録であり約35億字から成る。国会会議録を用いる理由は、現時点では、およそ同一の枠組みで一貫した通時的な現代日本語のコーパスで、ここで問題とする名詞と形容詞の多様な組み合わせについて分析に耐えるだけの数の用例を抽出しうる大きさのものが他に見当たらないことである（後に述べるように、国会会議録でもなお、十分多様な種類の名詞について分析できるとは言い難い）。他の種類のコーパスでの追試は将来に待たねばならない。

国会会議録の基本的な特徴は、松田編（2008）に詳しく述べられている。国会での発言には原稿や資料を読み上げるものなども含まれるが、少なくとも口頭で発話されたものの反映<sup>4</sup>であるという意味では話し言葉の記録と言える。

国会会議録のデータに形態素解析プログラム MeCab (0.97) と電子辞書 UniDic (1.3.12) による形態素解析を施し<sup>5</sup>、次に当たる表現を調査対象として抽出した。

#### (1) 調査対象とする表現の範囲

次の語類が「**名詞**{が・は・も・の} **形容詞類**」の接続をなし<sup>6</sup> 意味的に主述関係にあるもの

**名詞**：「二字漢語＋‘性/率/度/量/力’」の形の名詞。ただし、「期待可能性」のような複合的なものは除く。

**形容詞類**：次の2類のもの<sup>7</sup>。

「**大** 形容詞類—大きい、高い、強い、深い、濃い、多い、重い、大（ダ）、濃厚（ダ）

「**小** 形容詞類—小さい、低い、弱い、浅い、薄い、少ない、軽い、小（ダ）、希薄（ダ）

<sup>4</sup> 「整文」とか「字句の整理」とか呼ばれる過程を経ていることなどから「全くの自然発話とはみなせ」ず、特に、いわゆるラ抜き言葉のように規範的な立場から整文を施されやすい表現の研究に利用するには適していないことが指摘される（松田（2008: 130））。整文の実態については松田他（2008）が最近の音声データと会議録を比較して検討している。また、青山（1989）に、整文の前後の実例が示されている。それらから判断する限りでは、本稿で問題とするような名詞-形容詞類の結合パターンが整文の影響を受けた可能性は低いように思われる。また仮に修正を受けることがあったとしても、それはそれで日本語話者の意識の現れであり、通時的比較が無意味になるわけではないと考える。

<sup>5</sup> MeCab は <http://mecab.sourceforge.net/> で、UniDic は <http://www.tokuteicorpus.jp/dist/> で配布されている。なお、形態素解析に前後して送り仮名のゆれや拗音・促音表記のゆれの統合を行い、異体字・異字同語（例：関連性/関聯性）の統合を行った。形容詞類が仮名表記されている例で、MeCab が提示する最優先の解析が正しくないものの一部を見落としている可能性があるが、その数はごく少ないと思われる。

<sup>6</sup> 「可能性大」のように助詞なしのもの、「可能性が非常に高い」のように間に他要素を挟むものは含まない。形容詞は諸活用形のものを含むが、連用形（連用中止以外）で動詞にかかるものは、その動詞が「なる」の場合に限って調査範囲に含む（つまり、「高くなった」のようなものは含み、「高く見える」のようなものは含まない。その理由は、後者では主述関係の認定が難しいケースがあるからである。コーパスを用いた定量的研究では、厳密な再現性の保証が重要と考える）。

<sup>7</sup> それ自体としては評価性（望ましい/望ましくない）に関して中立的な量的形容詞類。「豊富」「豊か」「乏しい」のようなものは評価性を伴うので扱わない。また、「著しい」「甚だしい」「僅か」のように特別に高い/低い程度しか表さないものも扱わない。

### 3. 通時的変遷

以下、さまざまな名詞を取り上げ、「大」「小」形容詞類に分けて、1947年からの60年間の国会会議録での形容詞別の共起傾向を時期で区分して比較していく<sup>8</sup>。

分析対象とする名詞は、経験的な判断から、区分された一つの期間についておよそ100を超える用例数（問題とする形容詞類との共起用例数の計）があることが必要と考え、次の方針によって（「大」「小」形容詞類それぞれについて）選定した<sup>9</sup>。

I 60年を10年毎の6期に分けたときに4つ以上の期間で100以上の用例数のある名詞（10年区分で比較する）

II Iの条件には合わないが60年を20年毎の3期に分けたときに2つ以上の期間で100以上の用例数がある名詞（20年区分で比較する）

「大」「小」形容詞類について、分析対象としたすべての名詞に関する期間ごとの用例数の形容詞別内訳を表とグラフで示す。用例数が100に満たない期間については、グラフ下部の期間の表示に\*をつけ、分析に当たって特に留意する。また、用例数をテキストの100万字当たりにした値を示す。

#### 3.1. 「～性」の場合

「二字漢語＋‘性’」の形の名詞には意味的に多様なものがあるが、そのうちの多くは、程度の属性を表わして用いられることがある<sup>10</sup>。

##### 3.1.1. 「～性」と「大」形容詞類との共起傾向の変遷

分析対象となる名詞は、12語である。総用例数（60年間通算しての用例数）の多い名詞から順に並べて示す（この点は以下同じ）。

<sup>8</sup> 例えば「可能性は高くない」のような否定の形も「～性」と「高い」との共起用例数に含むので、「大」/「小」形容詞類との共起用例数というのは、内容として「～性」の大きさ/小ささを言う用例の数ということとは異なる。

<sup>9</sup> 結果として、「大」形容詞類と「小」形容詞類とで結合相手として取り上げる名詞の集合が異なることが生じる。

<sup>10</sup> 王（2002）は、「可燃性のガス/このガスは可燃性だ」のように形容動詞（～ノ/ダ型）的に用いられて二値的属性を表わす「～性」について論じているが、そのような語であっても、多くは、程度の属性を表わす用い方もまた可能である。例えば上の「可燃性」には「可燃性が高い」のような用例があり、同様な性質を持つ「出血性」にも（「出血性の難病」のような用例に加えて）「出血性の強い肝臓がん」のような用例がある。

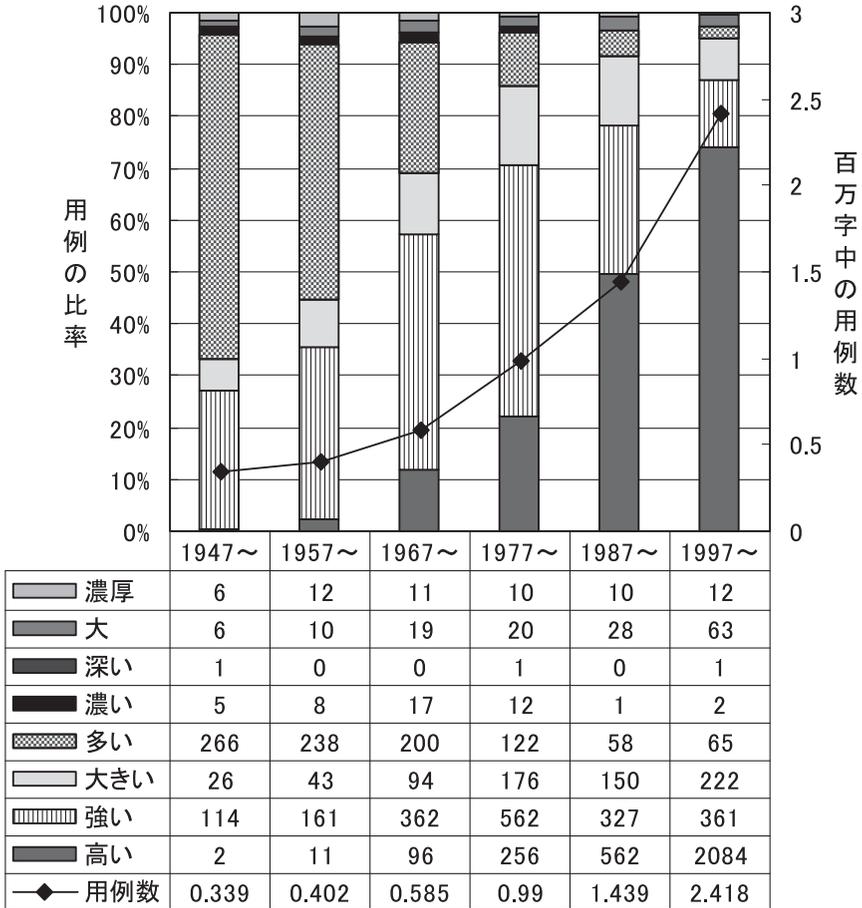


図1 「可能性」と「大」形容詞類の共起（総用例数 = 6,813）

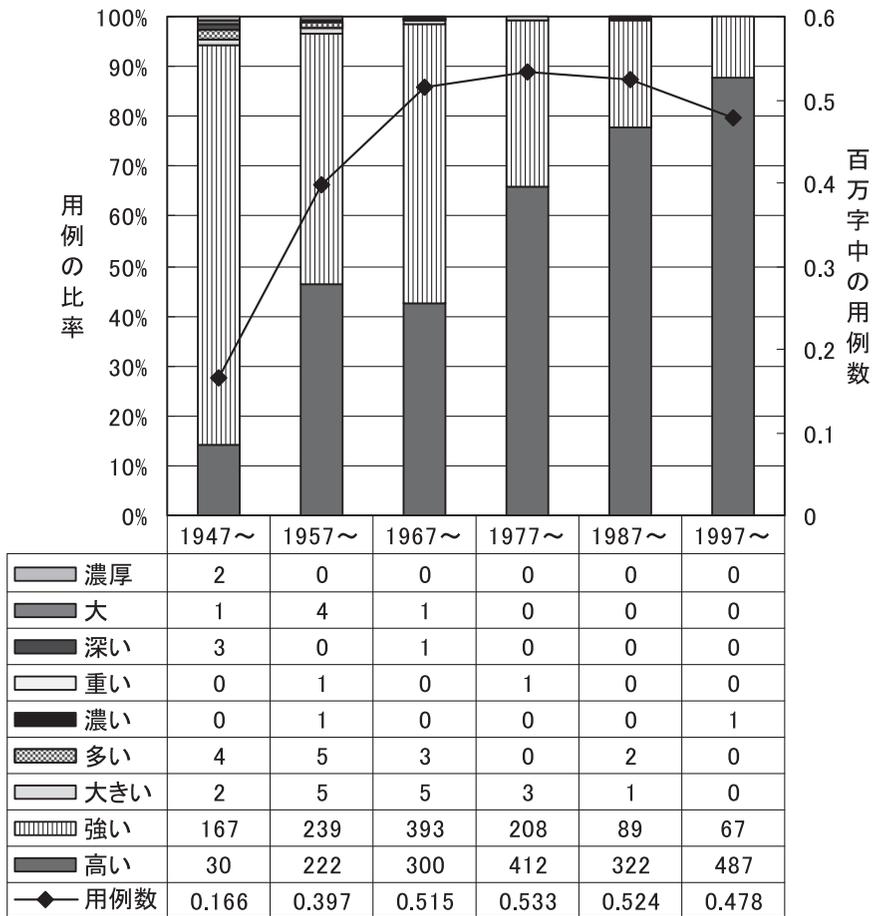


図2 「公共性」と「大」形容詞類の共起（総用例数 = 2,982）

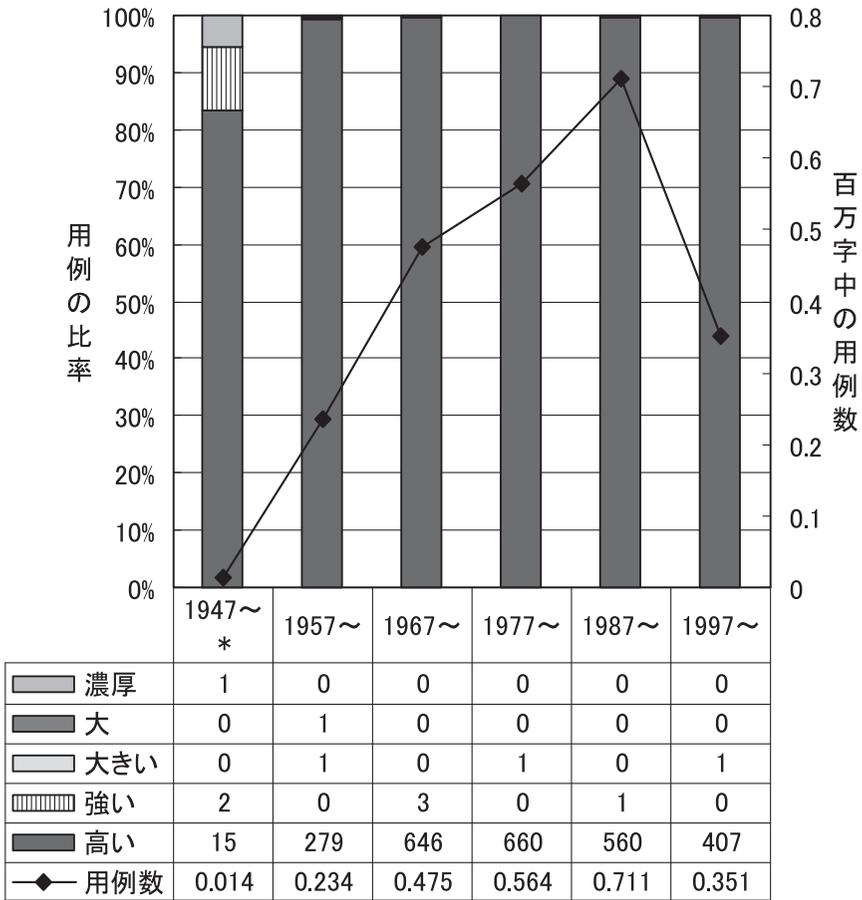


図3 「生産性」と「大」形容詞類の共起（総用例数 = 2,578）

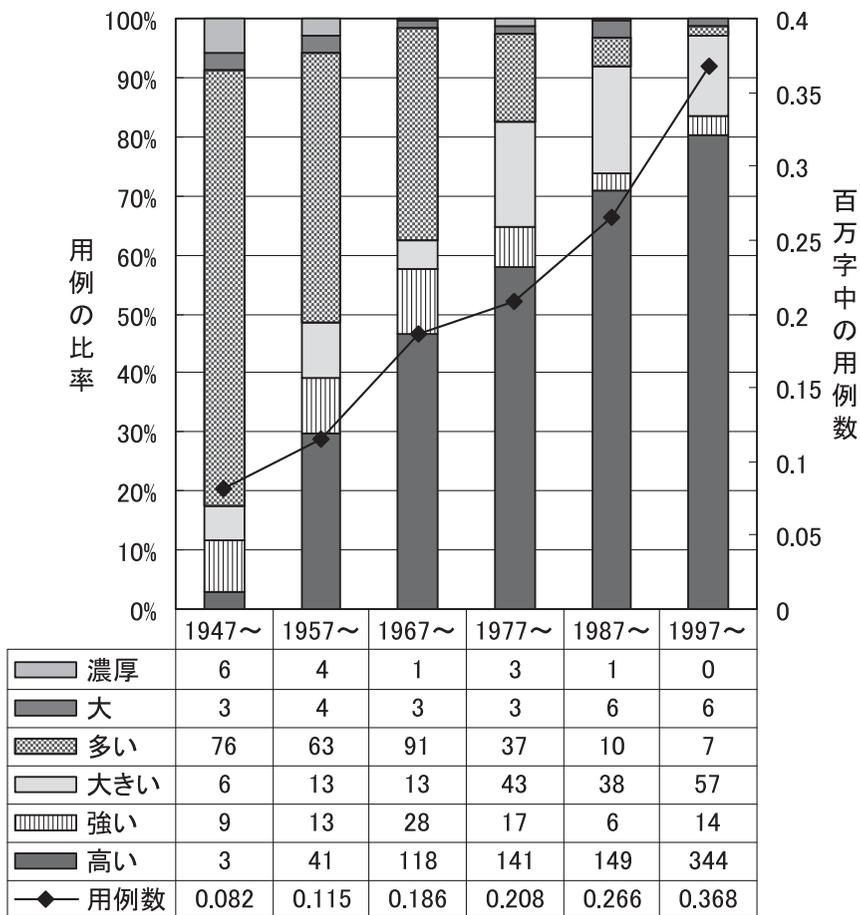


図4 「危険性」と「大」形容詞類の共起（総用例数 = 1,377）

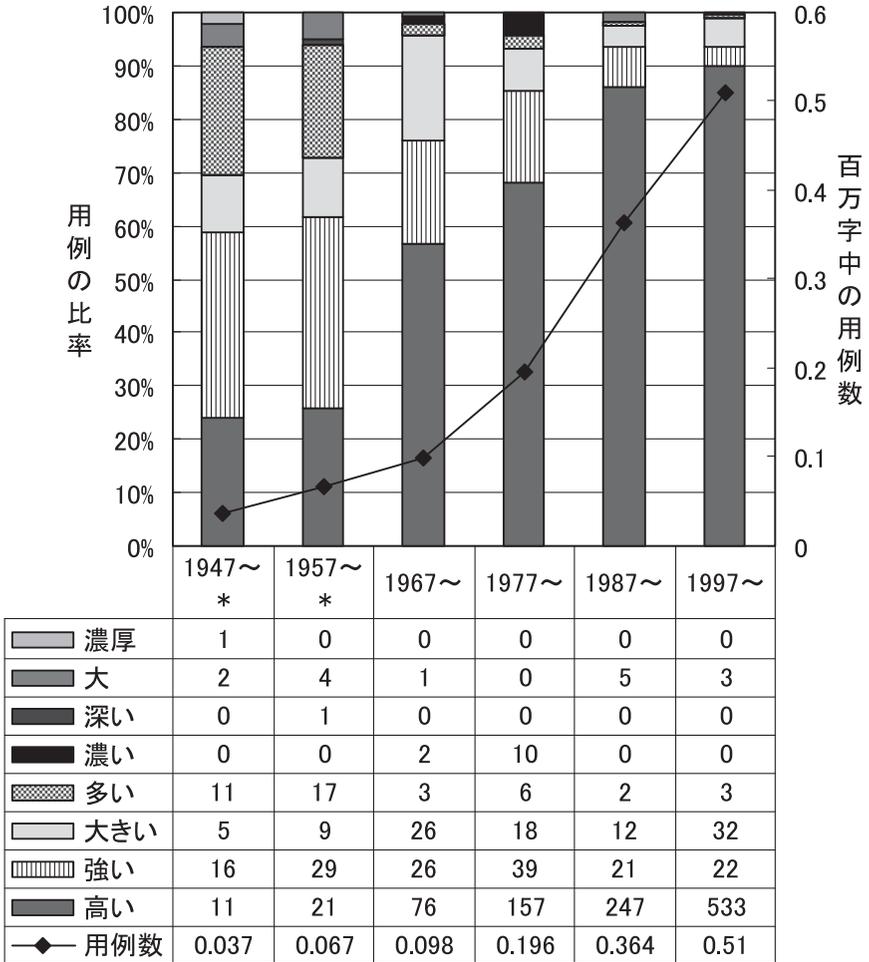


図5 「必要性」と「大」形容詞類の共起（総用例数 = 1,371）

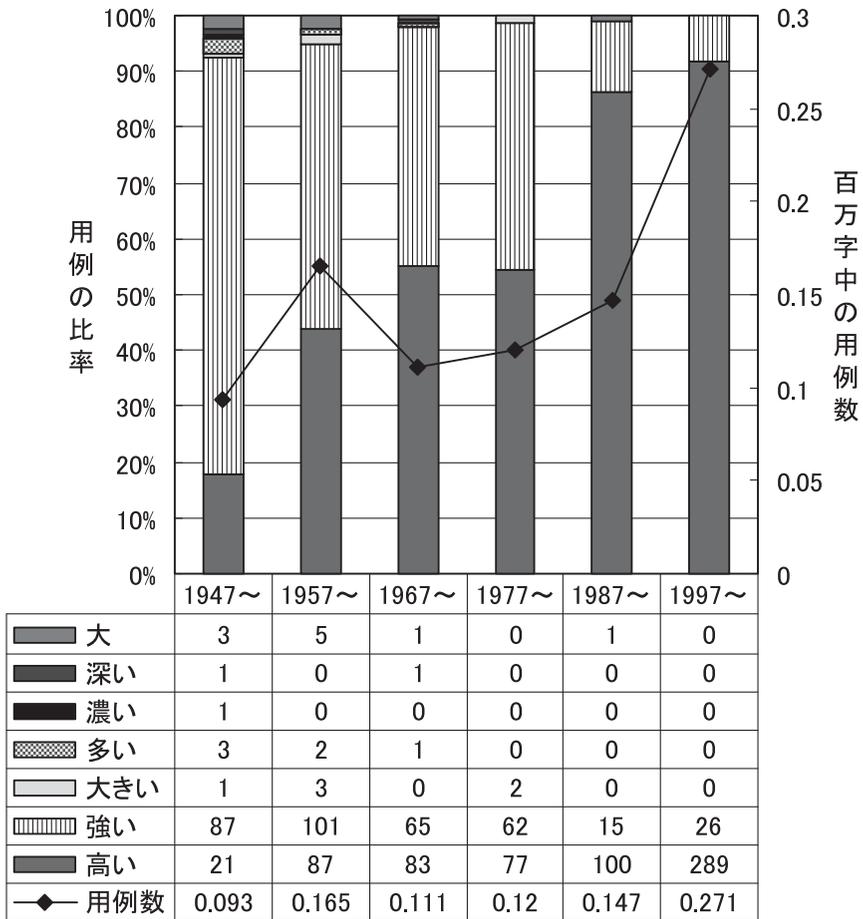


図6 「公益性」と「大」形容詞類の共起（総用例数 = 1,038）

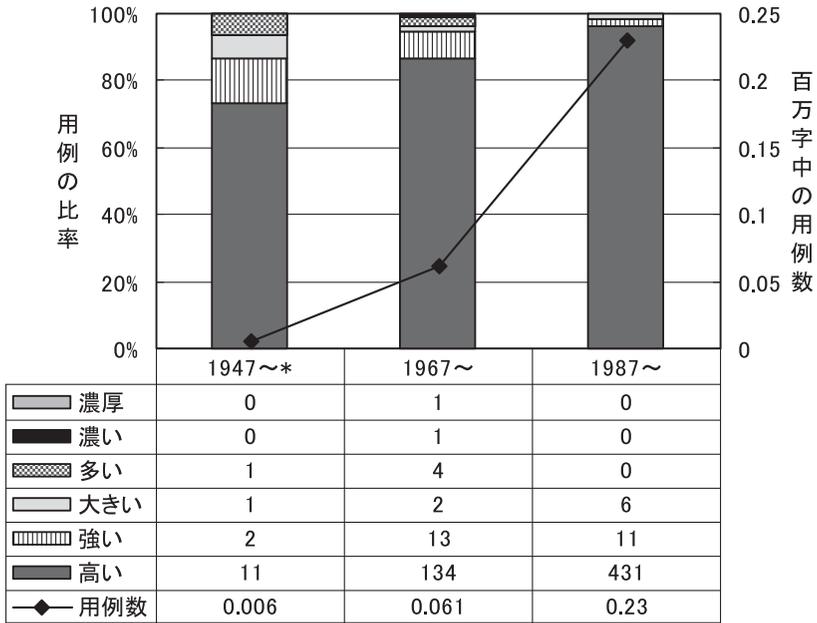


図7 「蓋然性」と「大」形容詞類の共起（総用例数 = 618）

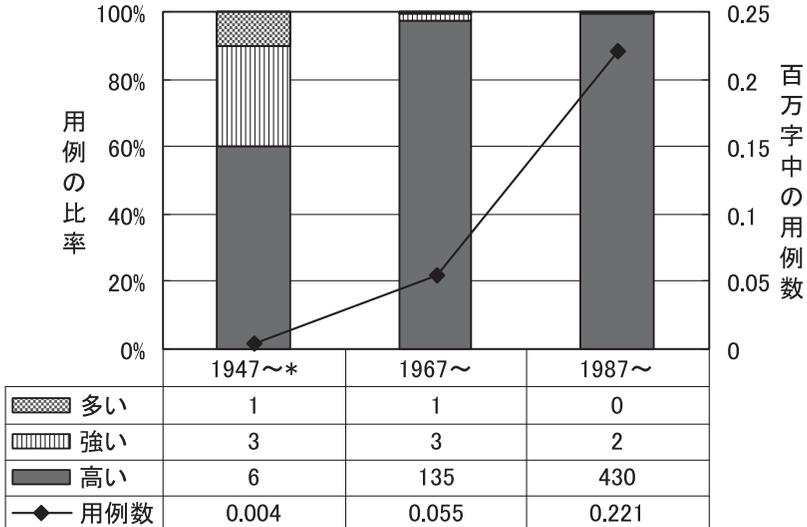


図8 「信頼性」と「大」形容詞類の共起（総用例数 = 581）

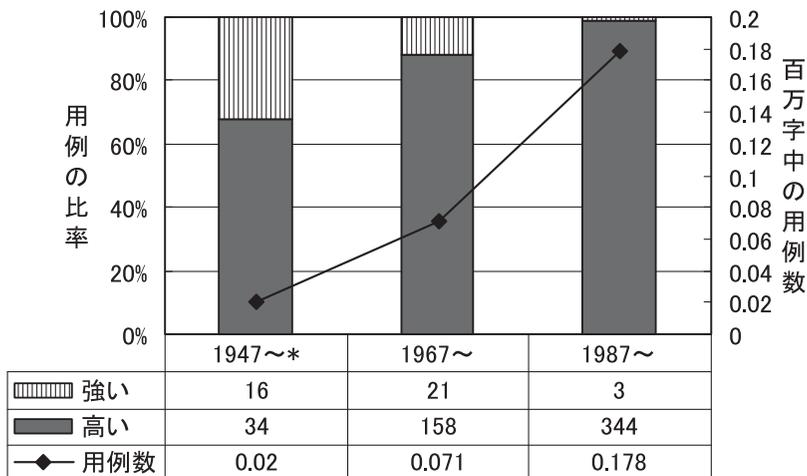


図9 「緊急性」と「大」形容詞類の共起（総用例数 = 576）

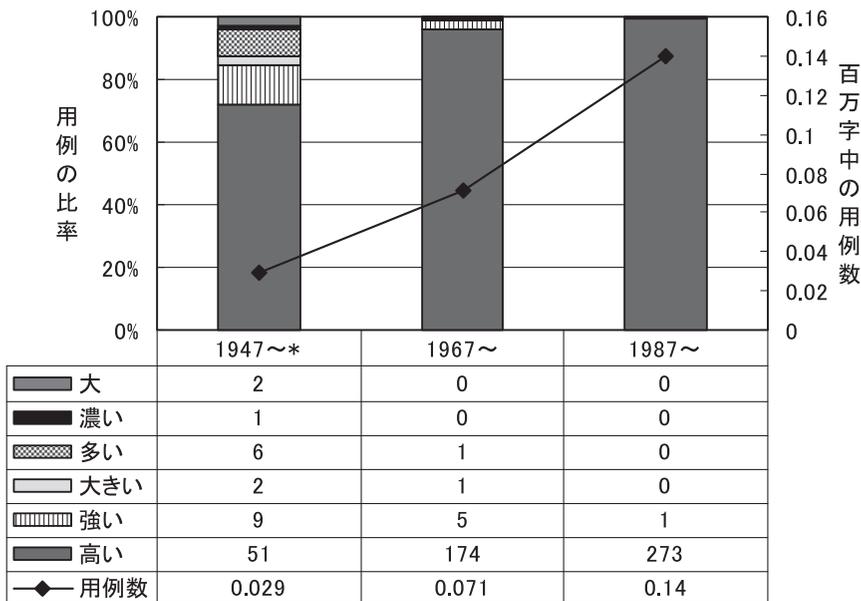


図10 「安全性」と「大」形容詞類の共起（総用例数 = 526）

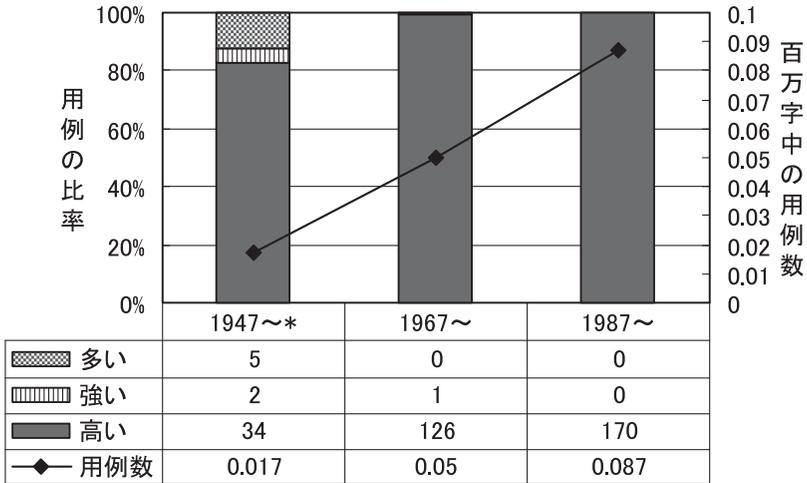


図 11 「収益性」と「大」形容詞類の共起（総用例数 = 338）

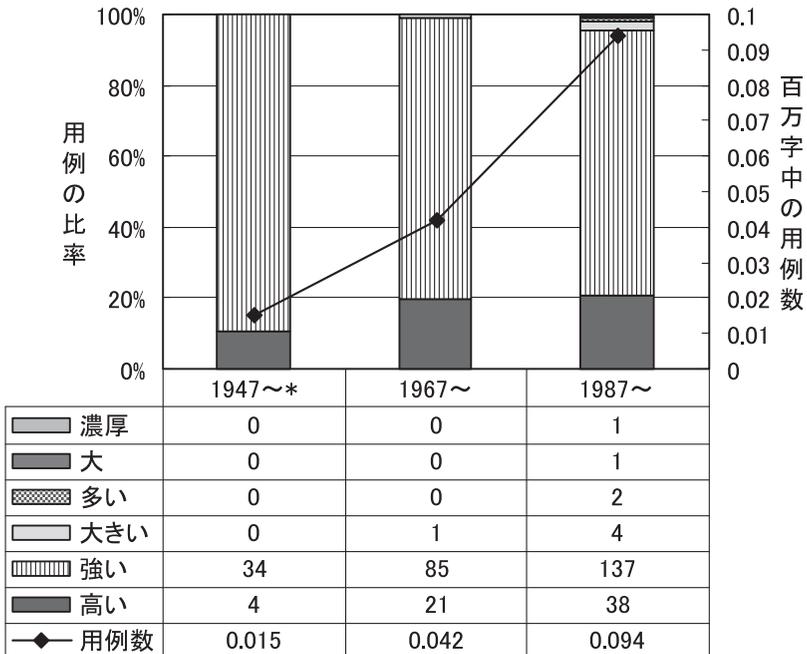


図 12 「逆進性」と「大」形容詞類の共起（総用例数 = 328）

「逆進性」を除くすべての語で、(既に100%近くになっている期間を除けば)「高い」との共起比率は観察期間内の全期間にわたっておおむね上昇を見せる。\*を付した時期を考慮外とした場合でも上の一般化に矛盾する点はない。

「逆進性」だけは、一貫して「強い」と共起することが多く、「高い」との共起比率は、(\*の時期を除外すると)明確な上昇を示していない。

「高い」との共起比率が上昇した名詞に関して、共起比率の低下した形容詞は「多い」「強い」などであるが、その構成・比率は名詞によって異なる。

なお、100万字当たりの総用例数について言うと、多くの名詞では単調に増加している。また、名詞によっては、「高い」との共起比率とほぼ比例しているかに見え、両者の間の有意味な関連が疑われるが、この点の解明は今後の課題とする。

「可能性」では、1947年からの10年間では「多い」との共起が63%(422例中266例)を占めているが、「可能性が多い」のような言い方に違和感を持つ話者も(現在は)あるようである(同様な組み合わせは他にもあるかも知れないが)。そのため1947～1956年と1997～2006年の2つの時期から用例を各5例無作為抽出したものを掲げておく。前後略は断らない。

#### 可能性・多い (1947～1956)

- (1) 当然総罷業というような形をも含む、あるいはその形になり得る可能性が多いというような点から、まず中央委員会では審議し得ない、権限を越えた問題であろうと思う。(1949:5衆:考査特別委18号:星加要(証人))
- (2) 従つてどうしても国税として持つて行かれる可能性が多い。(1954:11衆:地方行政委1号:河野一之(政府委員))
- (3) 中小企業の方が相当二、三月危機というものを受ける可能性が多いのではないかと、(1955:13衆:経済安定委6号:前田正男(委員長))
- (4) 国会両院から一名ずつというようなことになりますと、どうしてもその時の与党の議員が入るという可能性が多くなると思うのです。(1955:13衆:文部委13号:松本七郎)
- (5) これを早期に発見して、早期に適正な治療の措置を講ずれば、比較的短期間に且つ低廉な費用で治癒する可能性が多いにもかかわらず、(1956:19参:本会議22号:上條愛一)

#### 可能性・多い (1997～2006)

- (6) 加藤幹事長が共和の森川副社長から一千万円を受け取ったという疑惑はそのまま、未解決のままという、だから、むしろ可能性が多いという判断をしたということになっているようであります。(1997:140衆:予算委7号:福岡宗也)
- (7) あらゆる情報の第一報を受けた段階において、これが危機に発展する可能性の多いものか、現場対応で対処することの方が望ましいものなのか、そうした情報の整理という点では、(1998:142参:行財政改革等特別委9号 橋本龍太郎(国務大臣))

(8) そうでないと、具体的に裁判してみなければ結論はわからぬ、こういうような格好になりかねないという、法的安定性の面で問題が生じてくる可能性が多過ぎるというふうにはちょっと思うので、(1999：145 衆：法務委 22 号：福岡宗也)

(9) 大変困難な病気でございますけれども、しかし、精神的なものがございまして、ある程度受け入れる気持ちで、一緒に考えてあげるというリーダーがそこにいれば、よくなる可能性が多いのではないかと。(2004：159 衆：文科委 13 号：香川芳子 (参考人))

(10) そうしますと、これまで人事院のチェックを受けていた公社の天下りというのが全然民営化されることによって減らずに、野放しになってかえって多くなっていくんじゃないか、その可能性が多いんじゃないかなと懸念しております。(2005：162 参：郵政民営化特別委 7 号：関口昌一)

### 3.1.2. 「～性」と「小」形容詞類との共起傾向の変遷

分析対象となる名詞は 4 語である。

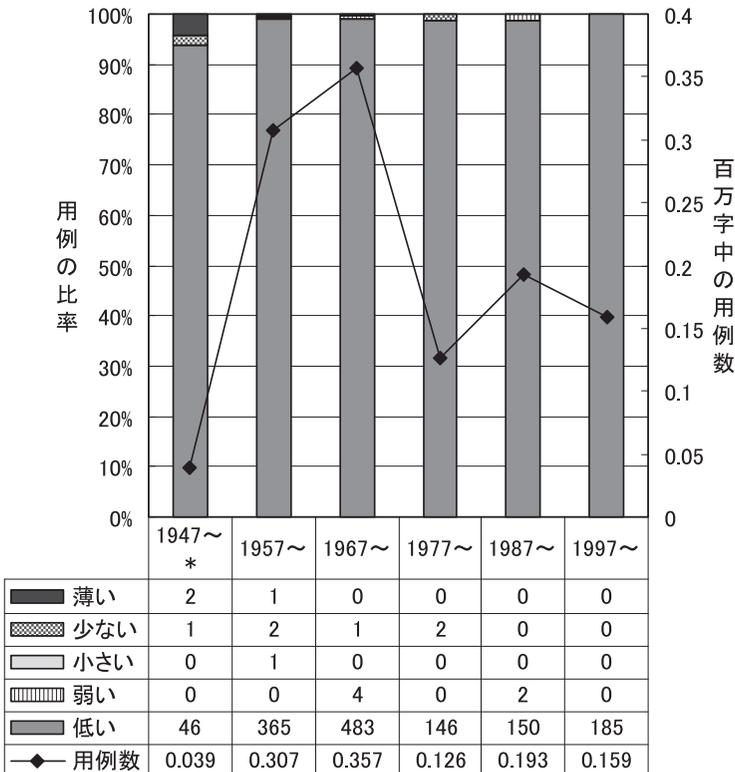


図 13 「生産性」と「小」形容詞類の共起 (総用例数 = 1,391)

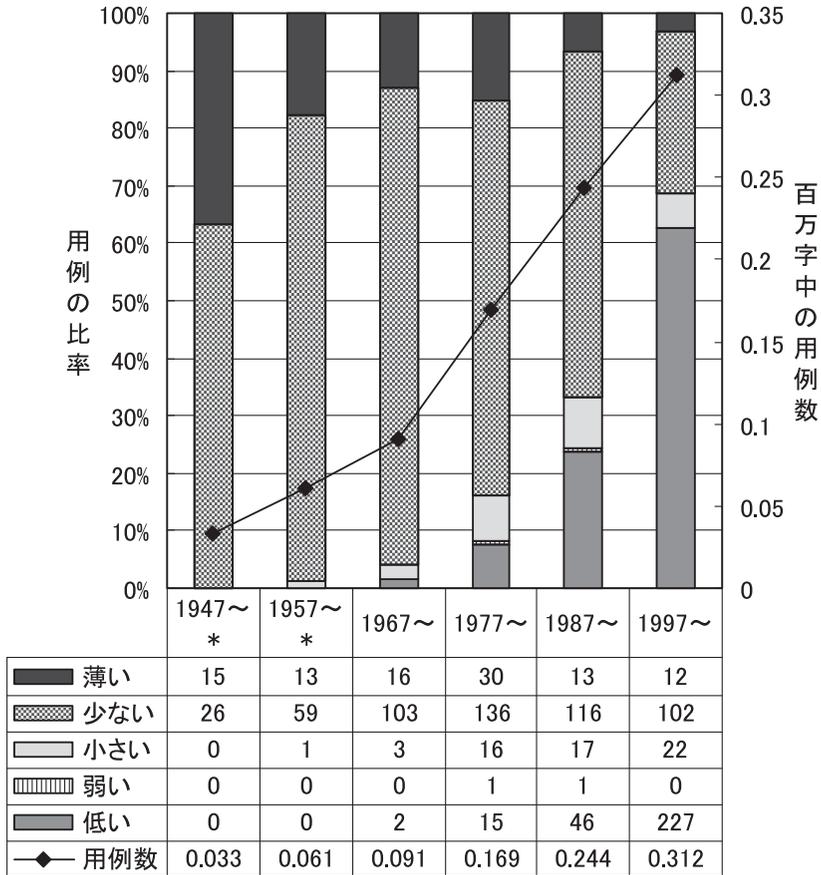


図 14 「可能性」と「小」形容詞類の共起（総用例数 = 992）

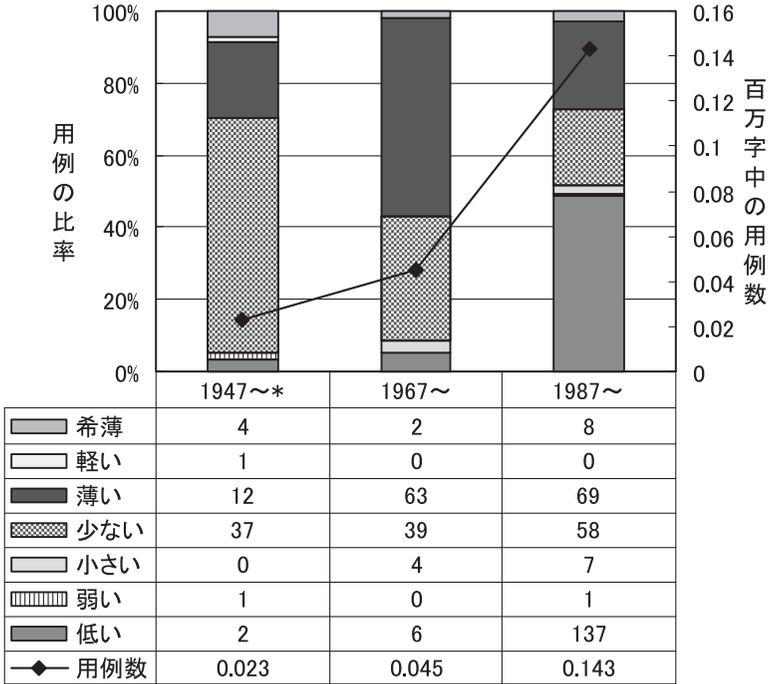


図 15 「必要性」と「小」形容詞類の共起 (総用例数 = 451)

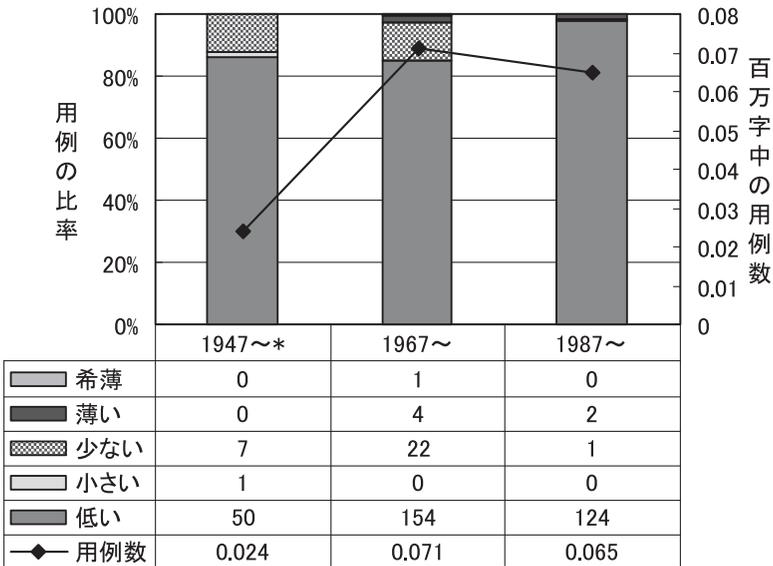


図 16 「収益性」と「小」形容詞類の共起 (総用例数 = 366)

「生産性」は、遅くとも1957年以降はほとんど「低い」としか共起しておらず、これは同じ名詞の「高い」との共起傾向と対応している。

また、「可能性」「必要性」では「低い」の比率が上昇を示している。これは、同じ名詞に対する「高い」の比率上昇と対応するよう見える。それに対して、比率が低下した形容詞は主に「少ない」である。「薄い」も用いられているが、これは、対応する「濃い」の用例が非常に少ない。

「収益性」についても、少なくとも1967年以降は、「低い」との共起比率が上昇している。

要するに、以上の名詞を見る限りでは、早い時期から「低い」との共起が高率であったか、または調査期間内で「低い」との共起比率が増加しているかのどちらかである。

### 3.1.3. 「～性」のまとめ

「～性」の形の名詞の中には、戦後の早い時期から一貫して「高い」「低い」との共起傾向の強い語がある一方、調査範囲の多くの語で「高い」「低い」との共起傾向が強まった可能性がある。もっとも特に「小」形容詞類との共起に関しては調査の条件を満たすだけの用例数のある語が少なく、なお一般的なことは述べ難い。

以下は、「～性」の場合に比べ分析対象となる語が少ないのでやや簡単に見ていく。

## 3.2. 「～率」の場合

「～率」の形の語は一般に一種の比率を意味し、当然、程度的な属性を表わす。

### 3.2.1. 「～率」と「大」形容詞類との共起傾向の変遷

分析対象となるのは3語である。

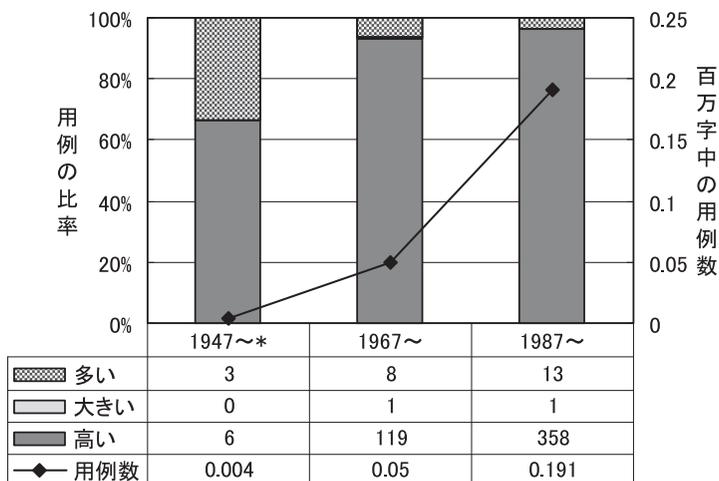


図17 「失業率」と「大」形容詞類の共起（総用例数 = 509）

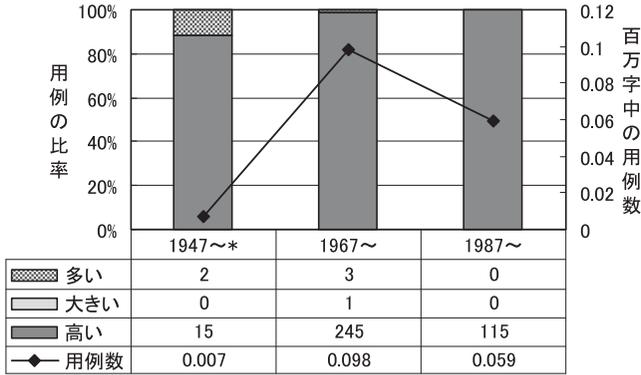


図 18 「貯蓄率」と「大」形容詞類の共起（総用例数 = 381）

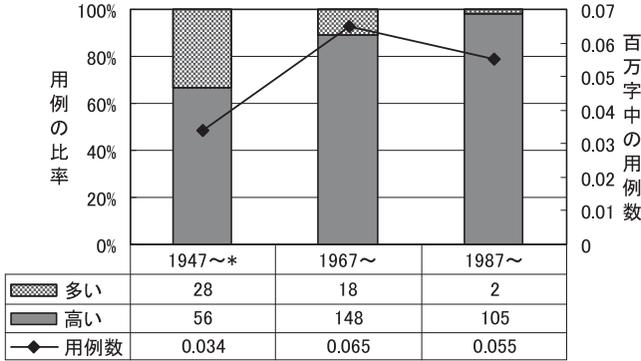


図 19 「死亡率」と「大」形容詞類の共起（総用例数 = 357）

### 3.2.2. 「～率」と「小」形容詞類との共起傾向の変遷

分析対象となるのは3語である。

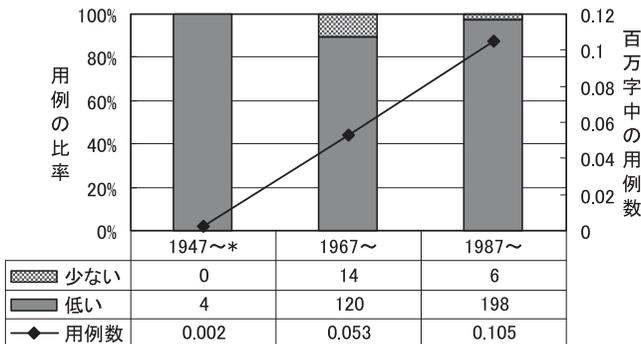


図 20 「自給率」と「小」形容詞類の共起（総用例数 = 342）

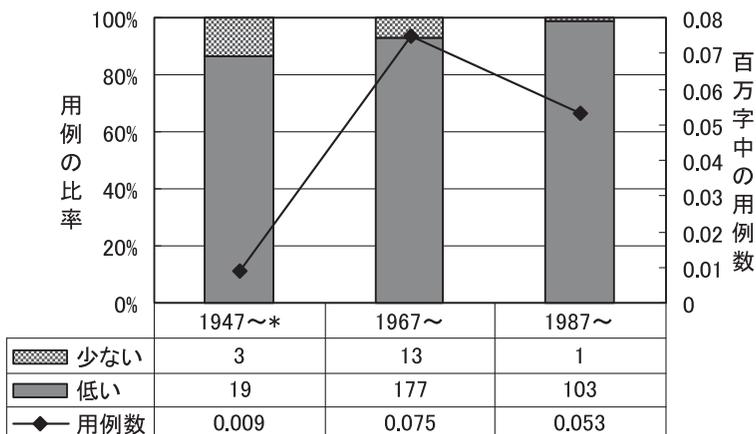


図 21 「加入率」と「小」形容詞類の共起（総用例数 = 316）

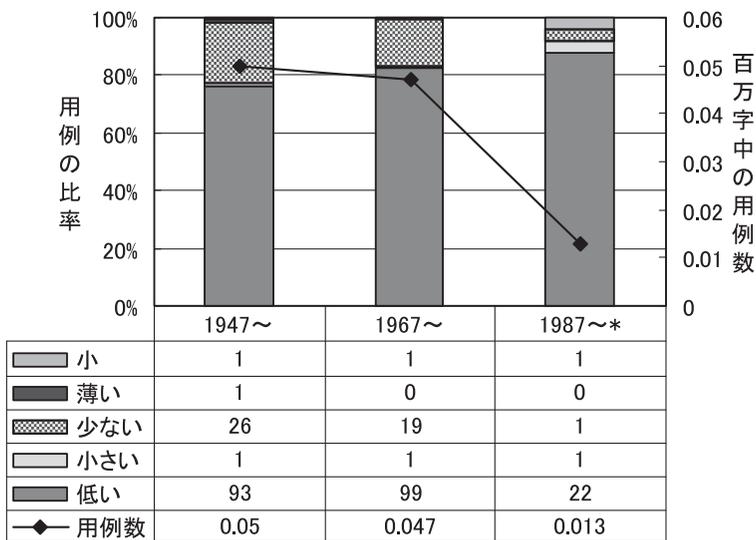


図 22 「補助率」と「小」形容詞類の共起（総用例数 = 267）

### 3.2.3. 「～率」のまとめ

分析対象の語の範囲では、(図 20「自給率」の、僅か 4 例しかない期間を除けば)「～性」の場合と同様のことが言える。つまり、既に 100% 近くになっている期間を除けば、およそ、「高い」/「低い」との共起比率が時期を追って上昇している。ただし、元々それらとの共起比率が高い語が多く、上昇幅はそれほど大きくない。共起比率が低下した語は主として「多い」/「少ない」であり、その点では「～性」の場合よりも単純なパターンを示す。

### 3.3. 「～度」の場合

「～度」の形の語は、一般に、大小比較の可能な程度を表すものである。

#### 3.3.1. 「～度」と「大」形容詞類との共起傾向の変遷

分析対象となるのは3語である。

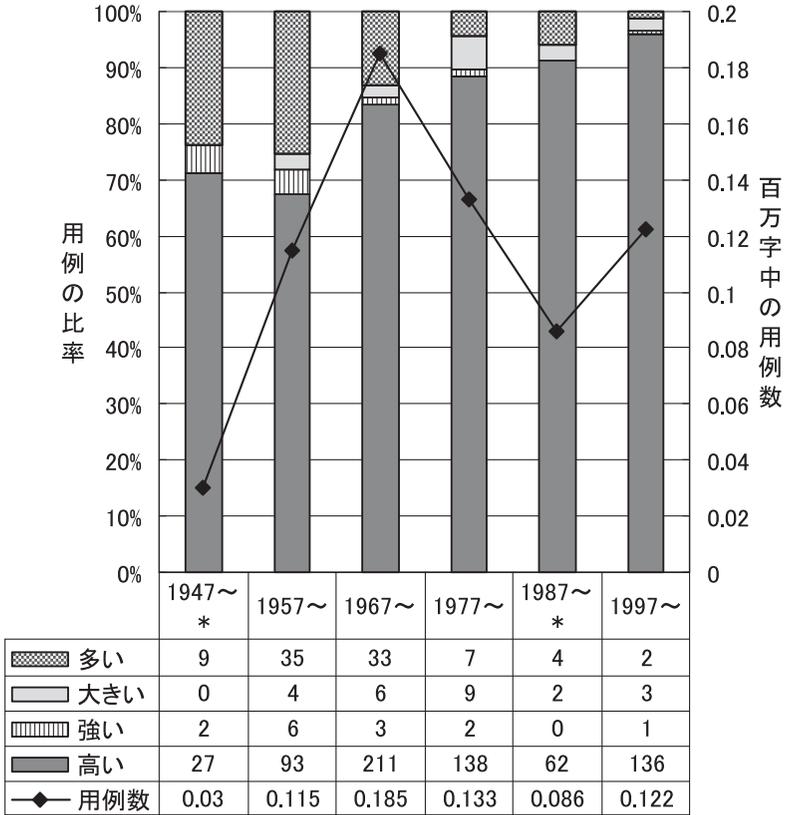


図 23 「危険度」と「大」形容詞類の共起（総用例数 = 795）

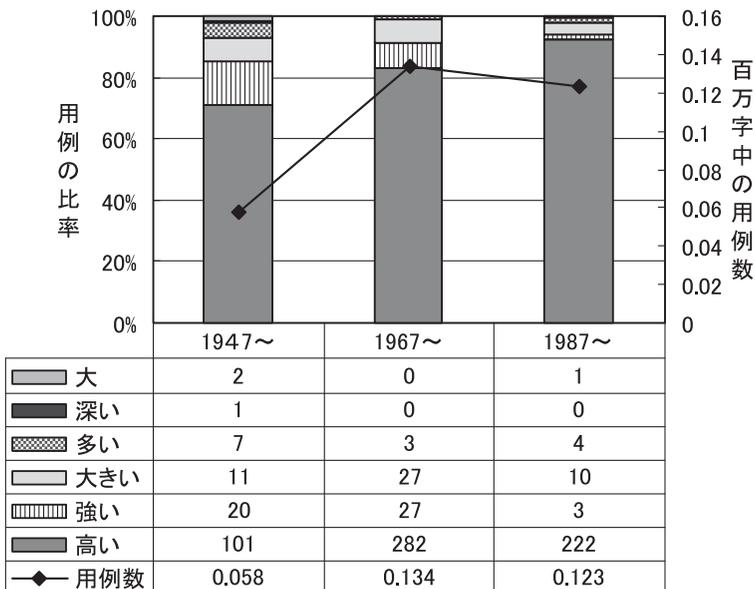


図 24 「依存度」と「大」形容詞類の共起 (総用例数 = 721)

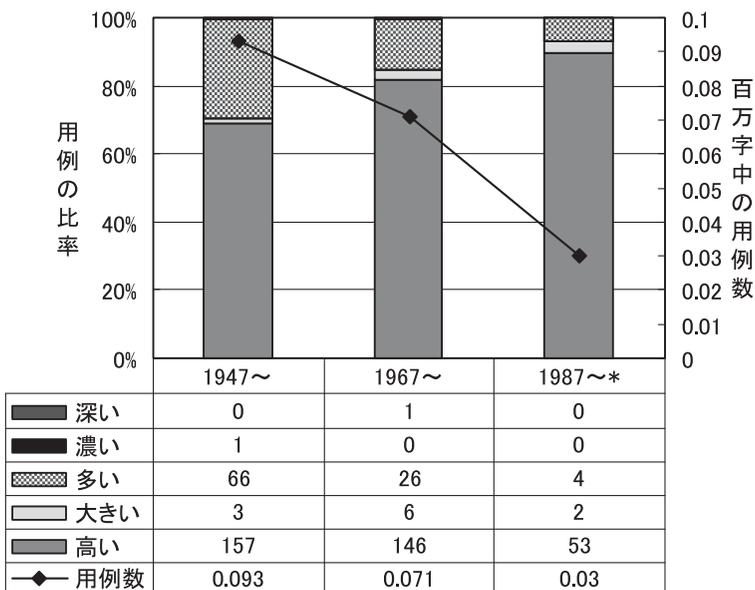


図 25 「利用度」と「大」形容詞類の共起 (総用例数 = 466)

「危険度」や「依存度」と「多い」との共起は現在ではやや考え難いように思われる（現に最近の用例数は少ない）ので、実例をあげておく。

(11) マグロ船というのが実は今日水産業界では問題になっておるのですね。これは労働条件その他も非常に劣悪であります。危険度が多い。(1964：46 衆：運輸委 23 号：高林康一（説明員）)

(12) その程度の飛行機になりますと、これも一社だけでやるということになりますと、非常に企業としてもやはり危険度が多いわけでございます(1965：48 参：商工委 11 号：太田稔（参考人）)

(13) 今までの制度から行きますならば、府県の財源というものは非常に国に依存度が多かつた(1954：19 参：地方行政委員 29 号：塚田十一郎（国務大臣）)

(14) 昼の人口、夜の人口ということも申し上げましたが、非常に新潟市に対する依存度が多うございます。(2003：156 衆：憲法調査会統治機構調査小委 2 号 阿部 學雄（参考人）)

### 3.3.2. 「～度」と「小」形容詞類との共起傾向の変遷

分析対象となるのは 1 語のみである。

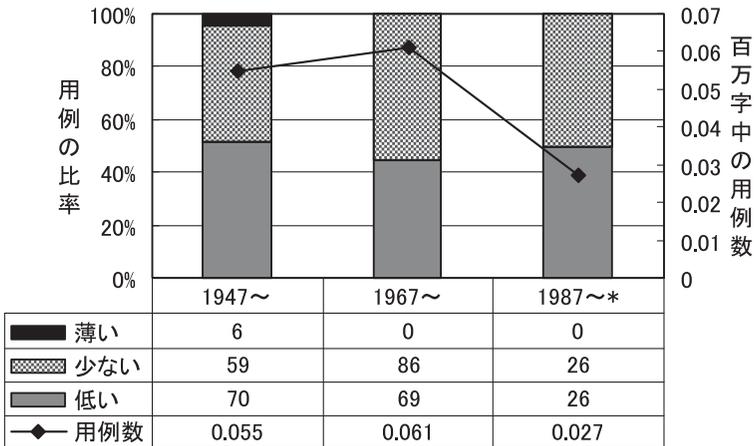


図 26 「利用度」と「小」形容詞類の共起（総用例数 = 343）

### 3.3.3. 「～度」のまとめ

「大」形容詞類との組み合わせでは、3 名詞とも小幅ながら「高い」との共起比率の上昇を見せる。比率の下降した語には「多い」「強い」などがあり、構成は名詞により異なる。「小」形容詞類との組み合わせに関しては、「利用度」では、最初の 20 年でのみ「薄い」が若干（135 例中 6 例）出現していることを除けば大きな変動が見られない。

### 3.4. 「～量」の場合

「～量」の形の語は、一般に一種の数量を意味し、当然程度的属性を表わす。なお、「小」形容詞類との共起に関しては、分析対象としての条件を満たす語がなかった。

#### 3.4.1. 「～量」と「大」形容詞類との共起傾向の変遷

分析対象となる語は1語だけである。

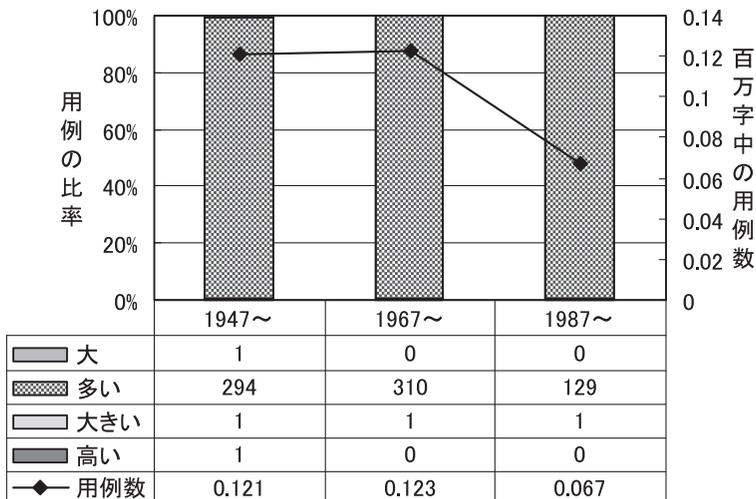


図 27 「交通量」と「大」形容詞類の共起（総用例数 = 738）

一貫してほぼ「多い」としか共起していないことが分かる。もっとも、すべての「～量」が「多い」以外の「大」形容詞類とほとんど共起しないわけではない。参考までに（用例数が少ないが）「事業量」の場合をあげておく。この語は「大きい」ともよく共起している。

表 1 （参考）「事業量」と「大」形容詞類の共起（総用例数 = 136）

	高い	大きい	多い	大	合計
1947～*	1	14	41	2	58
1967～*	2	22	32	1	57
1987～*	0	7	14	0	21
通算	3	43	87	3	136

### 3.5. 「～力」の場合

「二字漢語 + 「力」」の形の語の多くは、程度的属性を表わす側面を持っている。

### 3.5.1. 「～力」と「大」形容詞類との共起傾向の変遷

分析対象となるのは2語である。

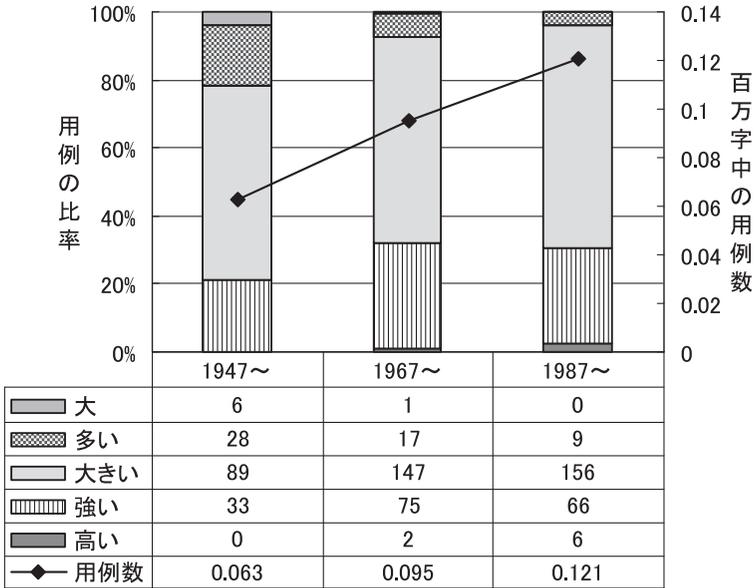


図 28 「影響力」と「大」形容詞類の共起（総用例数 = 635）

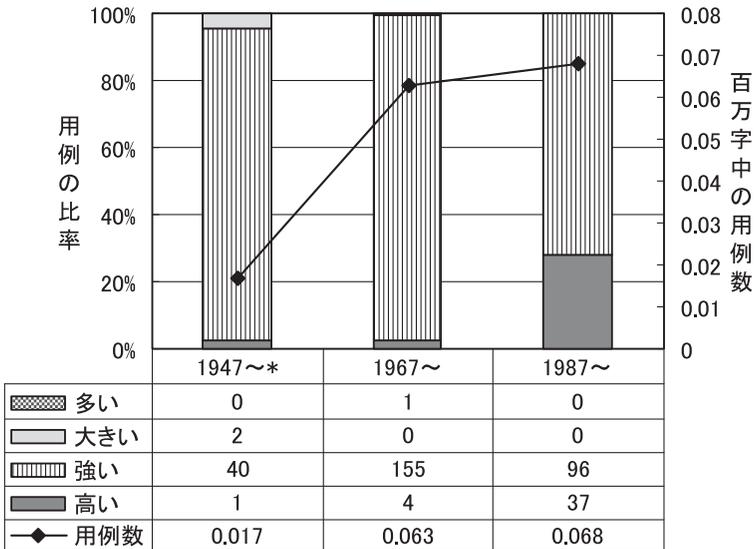


図 29 「競争力」と「大」形容詞類の共起（総用例数 = 336）

参考までに、「影響力が多い」の例を一例あげておく。

- (15) 小学校はもちろんのこと、いかなる段階においても、教師自身がすべての生徒への影響力が多いことを十分考えるがゆえに、(1955：衆22：行監特別委1号：松岡松平)

### 3.5.2. 「～力」と「小」形容詞類との共起傾向の変遷

分析対象となるのは1語のみである。

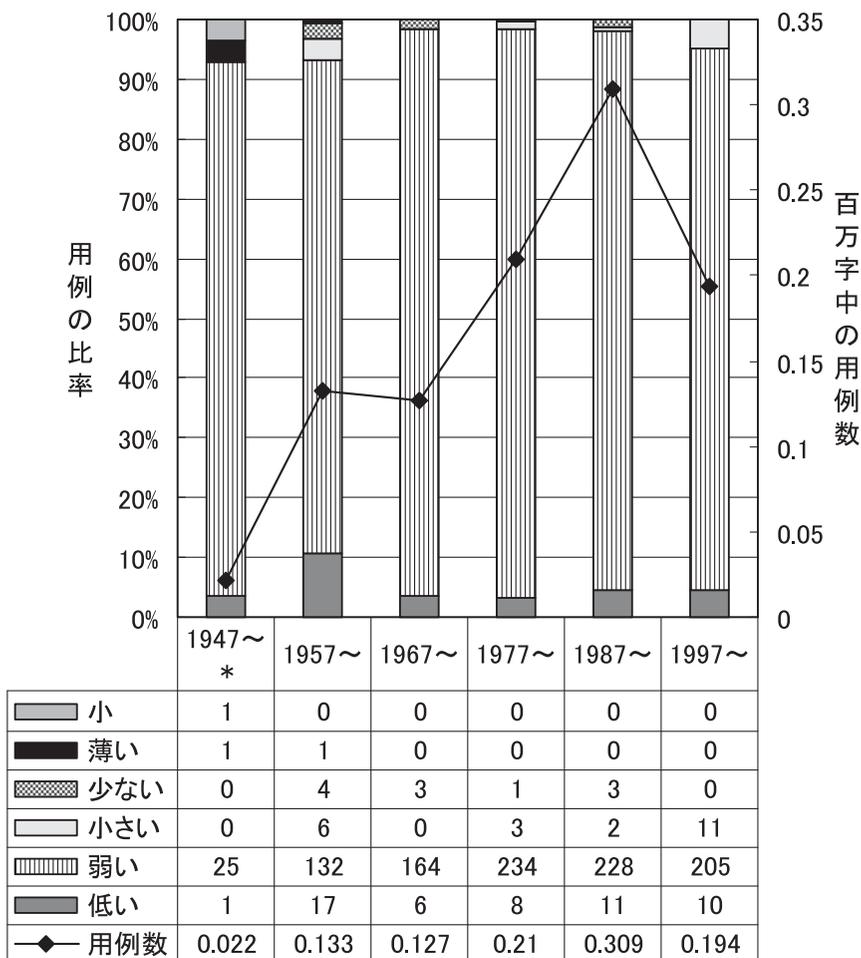


図30 「財政力」と「小」形容詞類の共起（総用例数 = 1,077）

### 3.5.3. 「～力」のまとめ

調査対象となる名詞が少なく明確なことは言えない。少なくとも、「高い」や「低い」との共起傾向が一般に強まっているとは言えないようである。

## 4. 全体のまとめ

程度の大小を問題にしうる側面を持つ名詞のうち、二字漢語を語基とする「～性」「～率」「～度」「～量」「～力」の形の名詞について、「大」「小」形容詞類との共起傾向の推移を戦後約60年間の国会会議録によって調査した。

十分な用例数のある名詞に関する限りでは、次のようなことが言える。

少なくとも、「～性」の形の名詞については、「大」形容詞類のうち「高い」との共起比率の上昇が多く語で観察された。また、「小」形容詞類のうち「低い」との共起比率が上昇している語もあり、「高い」と「低い」に関する傾向が対応しているかに見える語もある。また、「～率」「～度」に関しても、(調査対象とした語数は少ないが)、「高い」に関して同様な傾向が見られる。一方、「～量」や「～力」では、調査の範囲では変動傾向を述べにくい。

「～性」「～率」「～度」では、その程度の大きさを量るのに「高い」が主として用いられる方向へと変化が進行中の可能性がある。

実際それが言語変化であるとして、これらの名詞で「大きい」や「多い」や「強い」に代わって「高い」との共起比率が増大することに必然的理由を見出すのは難しい。

一つの解釈の方向を示せば、「～性」などを、(語に応じて)かさの大きさ・強力な感じ、などとして捉えるいわば素朴な見方よりも、棒グラフのように抽象化されたイメージで捉える見方が一般的になってきたということかもしれない<sup>11</sup>。こうした解釈を直接に証明するのは難しいが、それぞれの名詞の意味的な特徴と、その共起傾向推移パターンとの間の関連を考慮することにより、間接的な裏づけが得られる可能性はある。もっともそれには、コーパスの定量的分析以外の方法の助けを必要とするかもしれない。

本稿で取り上げたものの以外にも程度的側面を持つ名詞には様々なものがある。また、「増える/強まる/上昇する」「減る/弱まる/低下する」のような程度変化の表現や「ある/ない」「生じる/消える」のような存否・出現消滅の表現との関連も考慮する必要があるが、そうしたことは今後の課題である。

## 参考文献

- 青山學司 (1989) 「会議録作成に携わって一字句の整理を中心として」『立法と調査』152: 42-47.  
 秋元美晴 (1999) 「程度名詞と形容詞の連語性」『日本語教育』102: 20-29.  
 浅井真慧 (1983) 「連載ことばをえらぶ (12) 公算は『大きい』のか『強い』のか」『放送研究と調査』5月号: 68-69.

<sup>11</sup> 外国語の表現の影響という要因も考えられる。

- 浅井真慧 (1984) 「連載ことばをえらぶ (29) 関心は、強く、高く、深く」『放送研究と調査』10月号: 62-63.
- 國廣哲彌 (1982) 『意味論の方法』東京: 大修館書店.
- 王淑琴 (2002) 「修飾機能を持つ『-性』の語基の制約について—修飾機能を持たない『-性』の語基との比較から—」『日本語教育』114: 80-89.
- 西尾寅弥 (1972) 『形容詞の意味・用法の記述的研究』東京: 秀英出版.
- 服部匡 (2010a) 「大きさを表す形容詞類の選択傾向とその推移—『○○性が~』などの場合—」田野村忠温・服部匡・杉本武・石井正彦『コーパスを用いた日本語研究の精密化と新しい研究領域・手法の開発 IV』39-50. 科学研究費補助金特定領域研究「日本語コーパス」成果報告書.
- 服部匡 (2010b) 「大きさを表わす形容詞類の選択傾向—『~量/~率/~感/~力』などの場合—」田野村忠温・服部匡・杉本武・石井正彦『コーパスを用いた日本語研究の精密化と新しい研究領域・手法の開発 IV』51-62. 科学研究費補助金特定領域研究「日本語コーパス」成果報告書.
- 文化庁 (1984) 『言葉に関する問答集』11 東京: 大蔵省印刷局.
- 松田謙次郎 (編) (2008) 『国会会議録を使った言語研究』東京: ひつじ書房.
- 松田謙次郎 (2008) 「東京出身議員の発話に見る『ら抜き言葉』の変異と変化」松田謙次郎 (編) (2008), 111-134.
- 松田謙次郎・薄井良子・南部智史・岡田裕子 (2008) 「国会会議録はどれほど発言に忠実か? —一文の実態を探る—」松田謙次郎 (編) (2008), 33-62.

執筆者連絡先:

[受領日 2010年12月22日]

602-0893 京都市上京区丸烏今出川東入る玄武町 最終原稿受理日 2011年5月28日]

同志社女子大学

## Abstract

### Cooccurrence Patterns between Nouns Denoting Gradable Properties and Scalar Adjectivals: A Diachronic Study

TADASU HATTORI

*Doshisha Women's College of Liberal Arts*

This paper, based on the analysis of a corpus made up of the minutes of the National Diet of Japan since 1947, investigates the diachronic shift in the cooccurrence patterns between a noun denoting a gradable property (a complex noun formed of a 2-letter Sino-Japanese base and a suffix such as *-sei* 'ness', *-ritu* 'rate', *-do* 'degree', *-ryō* 'quantity', or *-ryoku* 'power') and a scalar adjectival (like *ōki* 'large', *ōi* 'many', *tuyoi* 'strong', *takai* 'high' / *tisai* 'small', *sukunai* 'few', *yowai* 'weak', *hikui* 'low') as they form a subject-predicate collocation.

As far as the nouns appearing in the corpus with sufficiently high frequency are concerned, the following observations hold. Many nouns of the form *-sei*, *-ritu*, or *-do* show an increased preference for *takai* among the positive scalar adjectivals diachronically. Also, some nouns of the same form show an increased preference for *hikui* among the negative scalar adjectivals, seemingly corresponding to the shift mentioned above. On the other hand, nouns of the form *-ryō* or *-ryoku* show no remarkable change in the preference patterns for the scalar adjectivals. These observations lead to the speculation that a change is in progress to the effect that *takai* is predominantly used for representing the positive values for the properties denoted by the nouns of the form *X-sei*, *X-ritu*, or *X-do*.